

被災地 ボランティア各地 一言記

9/8/2011

北村弘之

今回の東日本大震災（'11/3/11 14:46）後、何かお手伝いできないかと思っているところ新聞記事で神奈川災害ボランティアネットワークの存在を知り、早速宮城第一便に乗せていただき、現地の被災地ボランティアに赴きました。そんなこともあり、最近では政府の被災地記事より、現地の住んでいる人の様子を掲載している新聞記事に目がいくようになってきました。

■ 宮城県亘理町（5/10～11 宮城1便） 一般参加

ちょうど震災後2ヶ月目の活動。ある一軒の自宅のガレキ撤去に17名で伺いました。「この2ヶ月、一人で水に浸かった畳や家財道具を処分してきたがもう限界になり、皆さんにお願いした」と家主の話。終了後「これで先が見えた」と感謝の言葉。一人での限界そして、支えあいの大切を認識しました。

■ 宮城県東松島市（7/5～6 宮城15便） 運営スタッフとして参加

当日の作業は側溝のドロだし。街中に我々約30名が入ると、その足音や人声で、あちらこちらの家から一人またひとりと外に出てこられ、我々を「ありがとうございます」と労っていただきました。そして、休憩時にはお茶やドリンク、そしてさくらんぼなどを出していただいた。我々が元気をいただいたときでした。

■ 岩手県山田町（7/18～23 山田12便） 運営スタッフとして参加

今回は住宅地のガレキの撤去の他、仮設住宅への資材搬入、保育園での補助、山田高校避難所の風呂掃除、雨の日は写真洗浄と多彩な作業がありました。ガレキ撤去時、家主の方の差し入れをいただきました。その差し入れの購入先は、津波で残った「倉」を改造した店で野菜から飲み物と生活用品を提供しており、残った地元の人にはなくてもならない存在でした。商売している人は自分のやるべきことを理解して、地元の生活を守っているとつくづくと感じました。

■ 岩手県陸前高田市、大槌町、(釜石市)（8/22～26 岩手29便） 運営スタッフとして参加

被害面積が大きい陸前高田市。内陸からバスで入っていくと、海岸線より5kmあたりから津波の痕跡が見え始めました。そして、中心部に近づくにつれ、残った鉄筋のビルが見え始めました。そして、残った高田の松1本が海岸線にぽつりと立っていました。松に向かって「がんばれ」という声を出したくなる光景でした。

大槌町は、山田町と同様天然の湾に囲まれたところで、現地に入った日は町長選の告示日でした。選挙演説は見え、何か現在の地元の様子を表しているようでした。

山田湾には「オランダ島」、そして大槌湾にはNHKで有名なひょっこりひょうたん島のモデルとなったといわれる「瓢箪島」がありましたが、どちらとも大変な被害にあっているものの、その姿は残っており復興を目指す人の癒しになりそうです。

これら、三陸の市町村を支援している後方部隊は遠野市にある遠野まごころネットです。

ここの佐藤代表の訓示です。「ここは被災地であって観光地でない。被災地に配慮し言動に十分配慮していただきたい」

■ 宮城県石巻市 (9/6~7 宮城 33 便) 運営スタッフとして参加

工場などの産業集積地石巻市。震災で 50~80cm の土地が陥没しており、港に近い所では水の引かない場所が多く、これまでの被災地訪問の中では一番ガレキ撤去が遅れている感じでした。

今回の担当場所は、港から 2km、石巻川から 200m のところにある「多福院」という曹洞宗の 500 年程の歴史のあるお寺の本堂掃除。すでに何回ともなく片付けに入っていることがわかるものの、高さ 5m ほどの津波に仏具や畳などが使えなくなり、別のお寺から寄進を受け再建中と聞きました。

ここでは、生後 4 ヶ月の乳児を抱えたお嫁さんの、震災当日の生々しい話を聴くことができました。寺には数メートルの津波とともに車や家が押し寄せ、津波に浸かる車から泣き止まないクラクションがあり、そして流されていく人々の姿があり、まさに地獄のようだったようです。そのお嫁さんは自分の子どもを何とかしたいと思い、最後は首に浮き輪のようなものをつけ、子どもだけでも助けてもらいたいと必死ということでした。幸い 3 階で難を逃れたとのことでした。その後お寺は避難所になり地域の支援場所として欠かせない場所になったようです。

■ 最後に

私はたった数回ですが、ボランティア活動を通して、このように被災地を直に自分の目で見、そして被災地の方と会話ができて、人間のすごい前向きな生きる力を感じると同時に自然災害の中に生きる試練を与えられていることを感じています。また力作業のボランティアであります、心を通わすことのできる時間を持つことに感謝しています。

また、全国各地から支援にきているボランティア参加者がこれほどもいるのかと思うとやはり人間は家族と同様、社会の一員としてお互いの支えあいの中で生活をしていることを実感しています。

神奈川災害ボランティアネットワークでは、4 月から 8 月末までに 85 便のボラバス、そして延べ 3000 名近いボランティアが岩手県、宮城県で活動してきました。これだけの便を動かすのもすべてボランティアなのです。想いを持った人が一つになるとその力は数倍にもなることは素晴らしいことです。とりあえず 10 月末までにあと 25 便ほど被災地支援にバスがでるようです。被災地のニーズは変わるものの、ボランティアの想いはひとつです。

以上

ボランティア参加者 一言

9/8/2011

記 北村弘之

たった一日の震災ボランティアでしたが、初参加者が多かった今回は次のような感想がありました。(帰浜のバス内で発表したものを要約しました。石巻市湊小学校 VC 宮城 33 便)

- ・ 地元の人と直接話すことができ、自分にとってその思いが伝わってきた。(30 代男性 初)
- ・ お寺の掃除では「トイレ」を全力で担当でき有意義でした。(男学生 初)
- ・ 現地の人と直接話しを聞く機会があり、ボランティアに参加できてよかった。(女学生 初)
- ・ 側溝のドロだしを担当したが、自分にできることがあってよかった。テレビの映像でみるより実感があつた。(女学生 初)
- ・ 個人宅の草取りをした。草取りは何か抵抗があつたが、そこに住む人は生活に追われており、やもうえないのかと思った(掃除好きな 50 代女性 4 回目)
- ・ 個人宅の草取りに参加。そこのおばあちゃんの厳しいチェックにあつた。しかし、きれいになると微笑んだ顔が印象的であつた。(50 代男性 初)
- ・ 同じ思いを持った仲間の行動はすごい。(30 代男性 初)
- ・ 6 ヶ月近く経っており、片付いていると思つたがそうではなかつた。また、津波の被害影響にあまり驚きを感じない自分にビックリしている。(30 代女性 初)
- ・ お寺の掃除担当。一般の人でもできることに参加できたことはよかった。(40 代男性 初)
- ・ 復旧は現在のマイナス時点をもとの段階に戻すこと。自分ができることをやっていきたい。(30 代男性初)
- ・ お寺の掃除参加後に、そこのお寺のお嫁さんの震災当日の生々しい話を聴くことができジーンときた。(20 代女性 初)
- ・ いろんなボランティアの参加種類があると感じた。(女学生 初)
- ・ 若い学生の参加があり、自分のこども達にも伝えたい。(50 代女性 初)
- ・ 思いや志がひとつになることで力が発揮できることはすばらしい。また声を掛け合うことでチームワークがよくとれた。(40 代男性 2 回目)
- ・ 側溝班。女性ボランティアが頑張っていることに感銘した。(50 代男性 初)
- ・ いろんな人がボランティアとして全国各地から来られていることに感心した。(女子学生 初)
- ・ お寺掃除班。袈裟とかの仏具をなくしても、支援のお寺から譲り受けていることはすばらしい。また境内で、津波により自分ひとりが残つたおばあちゃんの話聞き、どうして対応してよいかわからなかつた。また、報道陣は表面的に話でなく、ボランティアが何をやっているか、どんなニーズがあるかというもつと突っ込んだ番組をすべきというチーム神戸の人の話が印象的だつた。(40 代女性 初)
- ・ 側溝班。チーム神戸と KSVN のチームワークができていると感じた。(30 代女性 2 回目)
- ・ 側溝班。午前中ケガをし、VC で休んでいるときは大変悔しかつた。(男学生 初)
- ・ お寺掃除を担当し、修行僧のような感じてあつた。(40 代男性 2 回目)
- ・ ボランティアと言っても、いろんな作業があり奥が深いと感じた。(40 代女性 2 回目)
- ・ 個人宅掃除班。庭の木に津波で漂流した「本」がまたあり、家の人に話したら、そんなところにあつたのと言われびっくり。毎日の生活で追われそこまでの余裕がないのかも。(30 代女性 8 回目)
- ・ 側溝班。チーム力の体験ができてよかった。(50 代男性 2 回目) (終わり)